

『意中の湖』 一九九八年刊

光りては深空はぐれのいかのぼり
にんじんに似し教師去り春の虹
火のやうな墓碑立ちて鳥渡るなり
幼木のはくれんひらく魂あらし
特攻兵たりける父に亀鳴けり
白鳥のこもごもとほく讃へあふ
短日やまた泣きさうな赤子の唇
水まくらくるむタオルの青い鳩
白地着てダミアの暗き声を聴く
虹たちてつぎの時雨の音とどく
うすらひや幽鬼の館朽ちて映る
喇叭吹く春の道化と片手組む

赤き帆はルオーの墓標柳絮飛ぶ
青鳶の城やパン焼く灯の洩るる
止まり木にカフエの猫と虹を待つ
一枚岩の刻み十字架クルスやうしほ炎ゆ
受難カルヴェール群像潮風が盛る苔の花
しづくして女人高野へ雪すすき
はまなすや天の扉にダリの刻
かまきりのこの目女の子と思ふ
喉にまで赤く刺さりて海市立つ
ダリ逝くや虹に飛びつく牛膝
まくなぎや打つて返せば首に憑く
生れし子に冬の月光きんきんす
蝶は身の微塵のとげを払ひ飛ぶ
デルヴォーの夜の祝祭の百日紅